

支石墓社会から木棺墓社会への転換 — 転換の過程と主体に対する検討を中心に — (上)

李 明勲*¹

訳：平郡達哉*²

Transition from dolmen society to wooden coffin tomb society Part 1 of 2

Lee, Myung Hoon
Translation : HIRAGORI Tatsuya

キーワード：韓半島南部地域、支石墓社会、木棺墓社会、転換過程、転換主体

はじめに

支石墓社会から木棺墓社会¹への転換に関する研究は時期区分と密接に関連しているため、早くから注目されてきた。初期の研究は銅剣の形態変化に焦点を当てており、細形銅剣の登場を時期区分の画期と見なしている(金元龍 1977)。琵琶形銅剣から細形銅剣への変化に基づく時期区分は依然として有効である。しかし、細形銅剣が出現する時期を青銅器時代後期(金元龍 1977; 李健茂 2003)と見るべきか、あるいは初期鉄器時代と見るべきか(安在皓 2006)という問題は、未だ明確に解決されていない。

時期区分の問題は転換に関連して最も重要な問題であるが、ここでは別の観点に注目したい。つまり、転換の様相に関する問題である。支石墓社会から木棺墓社会への転換様相に関する研究は、両集団の関係設定に注目して進められてきた。初期には両集団の関係を

葛藤関係と想定する傾向が強かった(朴淳発 1997)。その理由としては粘土帯土器文化集団が新たな文化要素を持つ移住民である点(朴淳発 1993)が大きく作用したためである。

しかし、住居址を中心に支石墓社会と木棺墓社会の共存事例が増加するにつれ、両集団の共存と相互交流に関する研究が進められた。住居址内で両文化の遺物が共伴していることを根拠に、両集団は婚姻などの人的交流を活発に行っていたであろうとする見解(李亨源 2015)や、嶺南地域における三角形粘土帯土器と松菊里型土器の形態的類似性を継承関係と見る研究(李在賢 2003)が代表的である。

一方、墳墓では支石墓の墓域から粘土帯土器や豆形土器が破片で確認されるのみで、追加的な資料が不足しているため両社会の具体的な関連性を設定することは難しいという見解(鄭仁盛 1999)が支配的である。また、支石墓の墓域で確認される粘土帯土器関連遺

*¹ 韓国国立中央博物館考古歴史部

*² 島根大学法文学部社会文化学科

物については支石墓の築造後、ある程度時間が経過した後に初期鉄器時代の遺物が流入した結果と見なす見解（尹ヒョンギョ 2019）が大部分である。

しかし、墳墓に関する研究は、最近、金海亀山洞支石墓の調査が終了したことで局面の転換を迎えている。なぜならば、亀山洞支石墓は重量 350～400 トンの上石と長さ 85m、幅 19m に達する墓域を持つ韓半島最大規模の支石墓であるにもかかわらず、埋葬主体部には木棺が使用され、副葬品として三角形粘土帯土器の中でも新しい型式に該当する外反口縁甕（李昌熙 2005）が出土したためである。これを基に嶺南地域では青銅器時代の遺構と認識されていたものが、実は初期鉄器時代まで存続していた可能性が高いという意見（李秀鴻 2019）が提起され、金海大成洞と鳳凰洞の丘陵の景観を支配していた支石墓が、少なくとも原三国時代前期まで景観を維持していたであろうという見解（李盛周 2023）も登場した。

このように亀山洞支石墓の調査以降、金海地域を中心に嶺南地域の支石墓社会が初期鉄器時代まで存続したという点について多くの研究者が同意しているものと考えられる。しかし、転換の様相に関する解像度が依然として低いことも事実である。また、転換の過程と社会的意味に関する具体的な考察も不足している状況である。支石墓社会から木棺墓社会への転換は、支石墓に代表される青銅器時代の終焉、新たな粘土帯土器文化を持つ移民の流入、鉄器文化の登場、さらに韓半島南部地域が東アジア秩序に編入される（李盛周 2007）という、韓半島史における最も重要な分岐点の一つである。したがって、両社会の転換様相はより高い解像度で説明されるべきであり、転換の過程と社会的意味を具体的に

検討する必要がある。

本稿ではこうした問題認識に基づき、支石墓社会から木棺墓社会への転換をより具体的に検討し、転換様相の解像度を鮮明に提示したい。特に支石墓が木棺墓に転換する過程を段階的に提示し、転換の主体が誰であるか、そして転換が持つ社会的意味について明らかにしよう。本稿の検討対象は、支石墓社会が最も遅くまで存続したとされる嶺南地域であり、精神文化の転換を示す墳墓資料を中心に検討を進める。

1. 転換期の共存様相

(1) 支石墓墓域出土遺物の検討

墳墓で確認される支石墓社会と木棺墓社会の共存様相は、支石墓の墓域で粘土帯土器および豆形土器が確認されたことから提起されはじめた。このような認識は支石墓社会の墳墓である墓域支石墓において、木棺墓社会の遺物である粘土帯土器と豆形土器が確認されるという、遺構と遺物の時間的不一致に基づいている。そのため、これを支石墓の築造後、ある程度時間が経過した後に初期鉄器時代の人々が執り行った儀礼の結果（尹ヒョンギョ 2019）とする見解もある。

では、考察すべき点は支石墓を主墓制としない初期鉄器時代の人々が、なぜ支石墓で儀礼行為を行ったのかである。もし、初期鉄器時代の人々が支石墓で儀礼行為を行ったとすれば、両社会の儀礼が同じものであるという前提が必要となる。両社会の儀礼が異なるのであれば、初期鉄器時代の人々が支石墓で儀礼を執り行った理由が説明できないためである。

両社会には明確に異なる儀礼メカニズムが確認される。支石墓社会では支石墓自体が儀

礼の対象であり空間であると同時に、社会を導く戦略であったと考えられる。一方、木棺墓社会では銅鏡・銅鈴・異形銅器・武器形青銅器などの青銅器を中心に儀式が執り行われ、儀式の空間も天神崇拜儀礼を執り行う祭場として高地性環溝（金権九 2012）や立大木祭儀が執り行われた多重環溝（李宗哲 2023）が提示されており、支石墓社会とは明らかな差異を見せる。何よりも木棺墓社会においても支石墓儀礼を執り行ったならば、支石墓の築造がなぜ中断されたのかを説明できない。したがって、支石墓の墓域で確認される粘土帯土器や豆形土器の一部は後世に流入した可能性もあるが²、大部分は支石墓社会の儀礼に関連したものと見られる。

〈表1〉は嶺南地域における支石墓の墓域で木棺墓社会の遺物が確認された事例である。周知のとおり、粘土帯土器片と豆形土器片が大半を占める³。注目すべき点は三つある。一つ目、確認されるほぼ全ての遺物が支石墓儀礼で確認されるように土器を破碎して

撒いた状態で確認される点である。遺物を毀損して墓域内に散布する行為は支石墓で行われた代表的な儀礼（李相吉 2000、姜ミンソク 2023）と理解されるが、〈表1〉の様相は使用された遺物が木棺墓社会の標識的な遺物であるだけで、儀礼の空間と行為の様相は支石墓社会のものである。木棺墓社会においても銅剣を折って埋納するなどの遺物棄損を通じた儀礼が確認（李相吉 2000）されているが、土器を破碎して墳墓に撒く行為は木棺墓社会の主要な儀礼ではなく、支石墓社会で行われた儀礼の姿である。

二つ目、埋葬主体部の形態と副葬された遺物がすべて支石墓社会のものである点である。密陽や慶州など埋葬主体部が確認されない事例もある。しかし、埋葬主体部が確認される場合、例外なく墳墓は割石を整然と積み上げた石棺墓、あるいは板石で組み立てた板石石棺墓である⁴。遺物も副葬されない場合もあるが、副葬された場合には磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器、玉を基本とする支石墓社

表1 嶺南地域支石墓墓域内木棺墓社会遺物出土一覧

地域	遺跡	遺構	埋葬主体部	墓域出土遺物	埋葬主体部出土遺物	
慶南	密陽	沙浦里	ナ-2号支石墓	無	豆形土器片	無
		サルネⅡ	1号支石墓	無	豆形土器片	無
	釜山	分節	2号墓	割石型石棺	三角形粘土帯土器片、黒色磨研土器片、豆形土器片、瓦質土器片、鉄鏃、板状鉄斧	石剣1点、石鏃4点、赤色磨研土器1点
			5号墓	割石型石棺	豆形土器片	赤色磨研土器1点
	杜邱洞林石	石槨墓	割石型石棺	円形粘土帯土器片	石剣1点（粘土帯土器段階）、豆形土器1点	
	宜寧	石谷里	6号支石墓	割石型石棺	円形粘土帯土器片	無
		南山里	2号石棺墓	割石型石棺	三角形粘土帯土器片	無
	昌原	徳川里	1号支石墓	割石型石棺	三角形粘土帯土器片、豆形土器片	石鏃2点、管玉5点
			4号支石墓	無	三角形粘土帯土器片	無
	咸安	岩刻画古墳	ナ号支石墓	土壙	豆形土器片	赤色磨研土器1点
慶北	慶州	武列王陵	敷石施設	無	豆形土器片	無
		典村里	1号石列遺構	無	三角形粘土帯土器片、豆形土器片	無
			2号祭壇遺構	無	三角形粘土帯土器片、豆形土器片	無
	大邱	達城坪村里	25号石棺墓	割石型石棺	三角形粘土帯土器片	石剣1点、石鏃11点
	義城	草田里	支石墓	無	豆形土器片	無
	漆谷	福星里	12号石棺墓	板石型石棺	石製剣把頭飾	石鏃11点、玉40点、赤色磨研土器1点

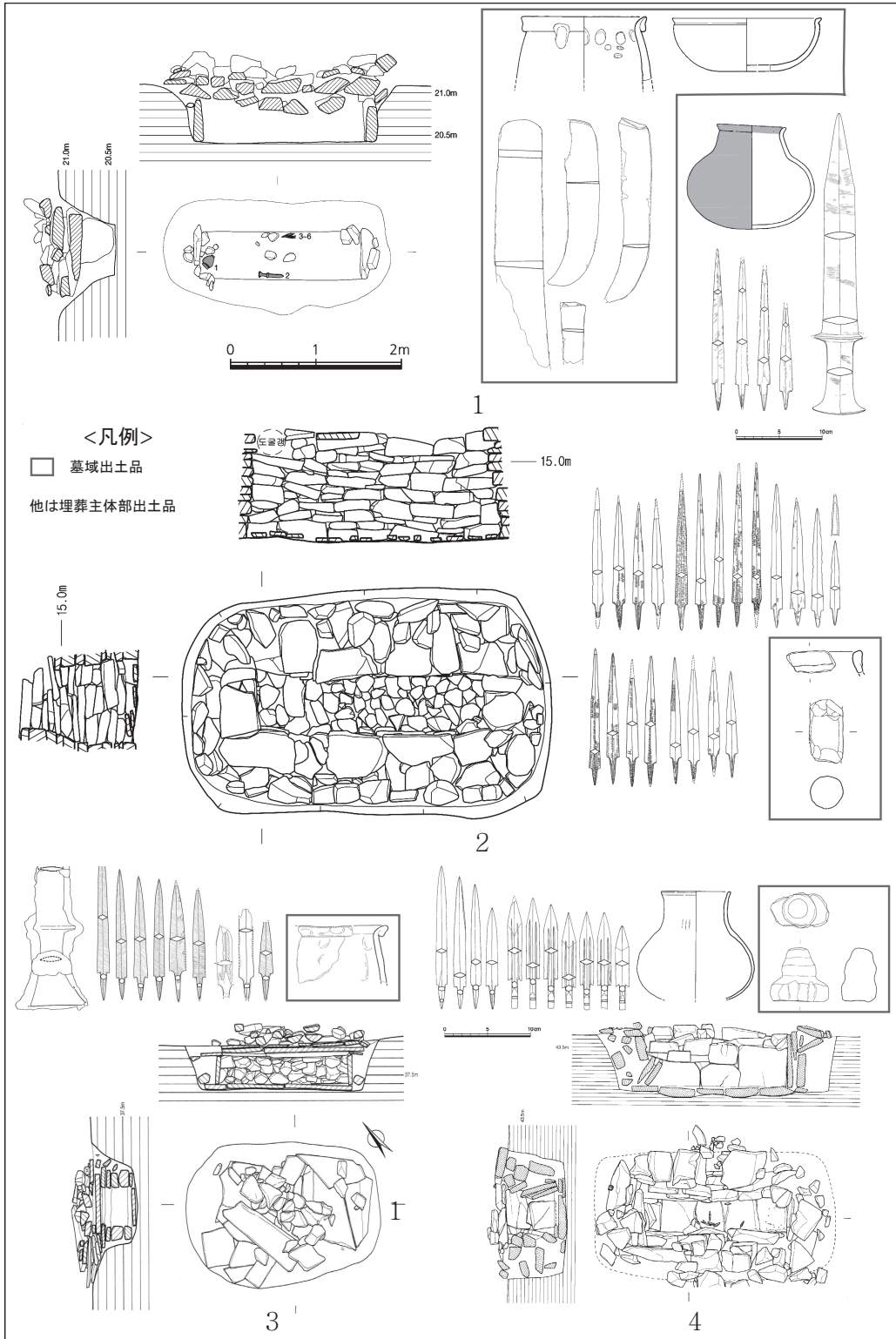


図1 支石墓墓域内出土木棺墓社会遺物

1: 釜山 分節2号 2: 昌原 徳川里1号 3: 達城 坪村里25号 4: 漆谷 福星里12号

会の遺物構成が確認される。

三つ目、嶺南地域では支石墓の墓域から三角形粘土帯土器が確認される点である。最近の多くの研究において嶺南地域の支石墓の下限が三角形粘土帯土器段階まで下る可能性が提起されている(李在賢 2003、李東熙 2022、李秀鴻 2023、李盛周 2023)。支石墓の墓域から三角形粘土帯土器片が確認される事例が多数あることもこうした見解と同一の様相と考えられる。しかし、支石墓の墓域で確認される遺物は後代に流入した可能性を完全に排除できないため、これ以上の具体的な議論を進めるには限界がある。したがって、具体的な議論は副葬遺物を検討する以下の章で詳述しよう。

(2) 埋葬主体部内の副葬遺物の検討

支石墓の墓域で木棺墓社会の遺物が確認されるのは、支石墓社会で執り行われた儀礼の結果と考えられるが、支石墓築造後かなりの時間が経過した後の初期鉄器時代に執り行われた儀礼の結果とする見解もある。このような認識はおそらく支石墓や石棺墓に初期鉄器時代の遺物が副葬される事例が非常に少なく、これに関する具体的な検討がなされてこなかったことに原因があると考えられる。

しかし本稿での検討結果、従来の認識とは異なり、支石墓や石棺墓にも細形銅剣、粘土帯土器、黒色磨研土器、豆形土器、無茎式(三角形)石鏃⁵、無茎式石剣⁶、剣把頭飾など木棺墓社会の標識的な遺物が副葬される事例が相当数確認されていることが分かった。このような様相は、支石墓の下限が初期鉄器時代まで続く可能性があるという最近の見解と合致する強力な証拠と考えられる。したがってここでは、嶺南地域における支石墓と石棺墓に木棺墓社会の遺物が副葬される事例を検討し、その意味について考察することとしよう。

〈表2〉は嶺南地域の支石墓と石棺墓において木棺墓社会の遺物が副葬された事例をまとめたものである。まず言及したいのは、従来の認識とは異なり相当数の事例が確認された点である。慶南地域では10地域の21遺跡で30基の墳墓が確認され、慶北地域では6地域の7遺跡で10基の墳墓が確認された。嶺南地域全体で見ると16地域の28遺跡で40基の支石墓や石棺墓に木棺墓社会の標識的な遺物が副葬されたのである。

嶺南地域の支石墓と石棺墓に木棺墓社会の遺物が副葬される様相を調べてみるといくつかの特徴が把握される。第一の特徴は、慶北地域と慶南地域の様相が異なる点である。慶北地域では円形粘土帯土器、黒色磨研土器、無茎式石鏃、無茎式石剣、剣把頭飾が主に確認される。特に円形粘土帯土器と黒色磨研土器の副葬事例が多い点が注目される。この両方の遺物が出土した事例は慶山大鶴里51-1番地(図2の1)、慶山大鶴里・校里(図2の2・3)、慶州光明洞山81-1番地(図2の4)、金泉文唐洞⁷(図5)、英陽新院里遺跡(図2の6)で確認できる。これらの遺跡は三角形粘土帯土器が登場する前に築造されたと考えられる。つまり、慶北地域において支石墓と石棺墓に副葬された遺物は、概ね円形粘土帯土器段階に該当するものと考えられる。

一方、慶南地域は慶北地域とは異なり、三角形粘土帯土器段階に該当する遺物が多数確認され、明らかな違いを見せている。慶南地域においても巨済鵝州洞(図3の1)と陝川盈倉里(図3の5)で円形粘土帯土器が確認されている。また、泗川香村里(図3の3)、釜山長箭洞、杜邱洞林石(図3の4)では無茎式石剣が確認され、三角形粘土帯土器の登場より古い時期と考えられる遺跡が存在する。

表2 嶺南地域支石墓社会墳墓内の木棺墓社会遺物副葬一覧

地域	遺跡	遺構	埋葬主体	出土遺物		比較		
慶南	金海	龟山洞	A2-1号墓	木棺	外反口縁甕1点、台付鉢1点			
		内洞	1号支石墓	割石型石棺	細形銅剣1点、黒色磨研土器1点			
			2号支石墓	割石型石棺	弥生系土器1点、赤色磨研土器1点		弥生中期	
			3号支石墓	割石型石棺	弥生系土器1点、赤色磨研土器1点		弥生中期	
		大成洞	84号墳	木棺	内部	石剣1点、石鎌5点 赤色磨研土器1点		
					蓋石密封土	カリガラス 1000余点		
					蓋石上部	鍛造鉄斧1点		
		1号支石墓	割石型石棺	内部	石鎌28点、赤色磨研土器1点			
					蓋石上部	無文碗1点		
		新文里	3号墓	板石型石棺	変形琵琶形銅剣1点、赤色磨研土器1点、石鎌6点			鎮東里式銅剣
	栗下里	B-9号墓	割石型石棺	細形銅剣1点、劍把頭飾1点			木棺？	
	会峴里	1号甕棺墓	甕棺	弥生系土器（甕棺）			弥生中期土器、支石墓、石棺墓共存	
		2号甕棺墓	甕棺	弥生系土器（甕棺）				
		3号甕棺墓	甕棺	細形銅剣1点、銅鉈、弥生系土器（甕棺）				
	茂溪里	支石墓	割石型石棺？	銅鎌3点、石剣1点、石鎌8点 管玉3点			銅鎌は銅丈再加工品	
	昌原	徳川里	7号墓	割石型石棺	無茎式石鎌1点、石剣1点、石鎌3点、赤色磨研土器1点			粘土帯土器段階石鎌
			16号墓	割石型石棺	変形琵琶形銅剣1点、石剣1点、赤色磨研土器1点			
			21号墓	木棺	無茎式石鎌1点、石鎌4点、赤色磨研土器1点			粘土帯土器段階石鎌
		鎮東里	石棺墓？	板石型石棺？	変形琵琶形銅剣1点、石剣1点、石鎌1点、赤色磨研土器1点			鎮東里式銅剣
		新村里	Ⅲ-3号石棺墓	板石型石棺	赤色磨研土器1点、石鎌9点			粘土帯土器段階石鎌1点
	釜山	長箭洞	支石墓	？	石剣1点、劍把頭飾1点		粘土帯土器段階石剣	
		杜邱洞林石	石槨墓	割石型石棺	石剣1点、豆形土器1点		粘土帯土器段階石剣	
	固城	松川里ソルソム	5号石棺墓	板石型石棺	キンチャク形壺1点			
			9号石棺墓	板石型石棺	鉄剣1点			
		徳湖里	2号石槨墓	割石型石棺	銅矛片1点			
	巨濟	鵝州洞	4号支石墓	板石型石棺	円形粘土帯土器1点、管玉2点			
	南海	唐項里	13号支石墓	割石型石棺	銅鎌1点、石剣1点、石鎌2点			
	陝川	盈倉里	12号石棺墓	割石型石棺？	内部	管玉28点、球玉1点		
					蓋石補強土	円形粘土帯土器1点、黒色磨研土器1点		
	泗川	香村里	1号石棺墓	割石型石棺	石剣1点			粘土帯土器段階石剣
			5号石棺墓	割石型石棺	石剣1点、劍把頭飾1点			粘土帯土器段階石剣
	山清	白雲里	石棺墓？	板石型石棺？	細形銅剣4点、銅矛1点、銅鉈1点			工事中発見石棺墓出土と推定
	蔚山	上蓮岩	土壙積石墓	割石型石棺	石鎌2点			粘土帯土器段階石鎌
斗旺洞		1号石槨墓	割石型石棺	石剣1点、劍把頭飾1点			粘土帯土器段階石剣	
慶北	慶山	大鶴里51-1番地	2号石棺墓	板石型石棺	円形粘土帯土器1点、黒色磨研土器1点			
			1号石棺墓	板石型石棺	円形粘土帯土器1点			
		大鶴里・校里	5号石棺墓	板石型石棺	円形粘土帯土器1点、黒色磨研土器1点			
			6号石棺墓	板石型石棺	円形粘土帯土器1点			
	慶州山81-1番地	16号石槨墓	割石型石棺	円形粘土帯土器1点				
	金泉	文唐洞	1号木棺墓	木棺	変形琵琶形銅剣1点（円形）粘土帯土器1点、黒色磨研土器1点、石剣1点、天河石製小玉97点			粘土帯土器段階石剣
	安東	知礼里	19号支石墓	圜石型石棺	石剣1点、劍把頭飾1点、石鎌1点			粘土帯土器段階石剣・石鎌
	英陽	新院里	石棺墓	割石型石棺	黒色磨研土器1点 石鎌3点			
	浦項	鶴川里	4号石棺墓	板石型石棺	石剣1点、劍把頭飾1点			粘土帯土器段階石剣
			5号石棺墓	板石型石棺	劍把頭飾1点			

しかし、慶北地域とは異なり、三角形粘土帯土器段階の遺物が確認されるだけでなく、三角形粘土帯土器段階の新しい時期あるいは原三国時代の古い時期まで遡る可能性のある遺物も確認されており注目される。最も代表的な事例は金海亀山洞支石墓である。亀山洞 A2-1 号墓 (図 4 の 1) では、台付鉢 1 点とともに外反口縁甕 1 点が出土した。三角形粘土帯土器は最終段階になると単口縁化した形態へ変化する特徴を示す (李昌熙 2005)。亀山洞で出土した外反口縁甕も単口縁化したものに該当するため、三角形粘土帯土器段階の新しい時期 (李東熙 2022) と推定される。

金海大成洞 1 号支石墓では蓋石の上部から無文碗 1 点が出土した。この無文碗は瓦質土器の碗と器形が同じであることから、瓦質土器碗を模倣したものと判断する見解もある (李秀鴻 2023)。大成洞 84 号墳 (図 4 の 3) でも新しい時期の遺物が確認された。蓋石の密封土からカリガラス 1,000 余点が確認されたが、カリガラスは前期瓦質土器段階から出現 (大成洞古墳博物館 2013) すると考えられるため、大成洞 84 号墳も三角形粘土帯土器段階の新しい時期と推定される。また、蓋石と蓋石の間から鍛造鉄斧 1 点を確認されたが、これも埋葬主体部に副葬された磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器、そして蓋石密封土のカリガラスと共に副葬された可能性が高い (朴辰一 2023) と考えられる。金海内洞 2 号 (図 4 の 7) と 3 号支石墓、そして会峴里 D 地区 (図 4 の 4) でも弥生時代中期に編年される土器と甕棺 (李陽洙 2016) が確認された。このことから慶北地域では粘土帯土器段階の比較的古い時期までしか支石墓と石棺墓が持続しなかったのに対し⁸、慶南地域では三角形粘土帯土器が出現し、口縁が単縁化する非常に新しい時期まで持続したと考えられる。

このような様相は木棺墓社会への完全な転換が相対的に慶北地域が古く、洛東江下流域が新しいという見解 (李秀鴻 2023) と一致するものであり、慶南地域の支石墓社会は他地域に比べ非常に新しい時期まで持続したと見られる。特に金海地域が注目されるが、これについては後述しよう。

慶北地域と慶南地域で確認されるもう一つの相違点は、細形銅剣の副葬の有無である。この時期の慶北地域で銅剣が副葬された事例は、金泉文唐洞 1 号木棺墓の変形琵琶形銅剣が唯一である。この琵琶形銅剣は突起がほぼ消滅し剣身が平らで剣身下部も縮約されているため、琵琶形銅剣末期の形態 (徐吉徳 2018) と考えられる。しかし、全体的に琵琶形銅剣の形態を維持しているため、金泉文唐洞 1 号木棺墓は嶺南地域で銅剣が副葬された典型的な木棺墓の中で最も古い時期の首長墓 (李秀鴻 2020) と理解される。

一方、細形銅剣が支石墓や石棺墓から出土した事例は確認されていない。これは先に調べたとおり、慶北地域で比較的古い時期に支石墓と石棺墓の築造が中断されたことに原因があると考えられる。慶北地域は木棺墓社会へ完全に転換した後に該当する慶山林堂・陽地里、大邱八達洞・坪里洞・新西洞、漆谷深川里、浦項玉城里、慶州安東里・塔洞など多数の遺跡で細形銅剣が本格的に出現するためである。

対照的に慶南地域では支石墓と石棺墓に細形銅剣が副葬された事例が相当数確認される。金海内洞 1 号墓 (図 4 の 5)、金海栗下里 B-9 号墓 (図 4 の 6)、金海会峴里 3 号甕棺 (図 4 の 4)、山清白雲里石棺墓 (図 4 の 8) で計 7 点を確認された。また、変形琵琶形銅剣が金海新文里 3 号墓 (図 4 の 2)、昌原徳川里 16 号墓 (図 3 の 7)、昌原鎮東里石棺墓 (図

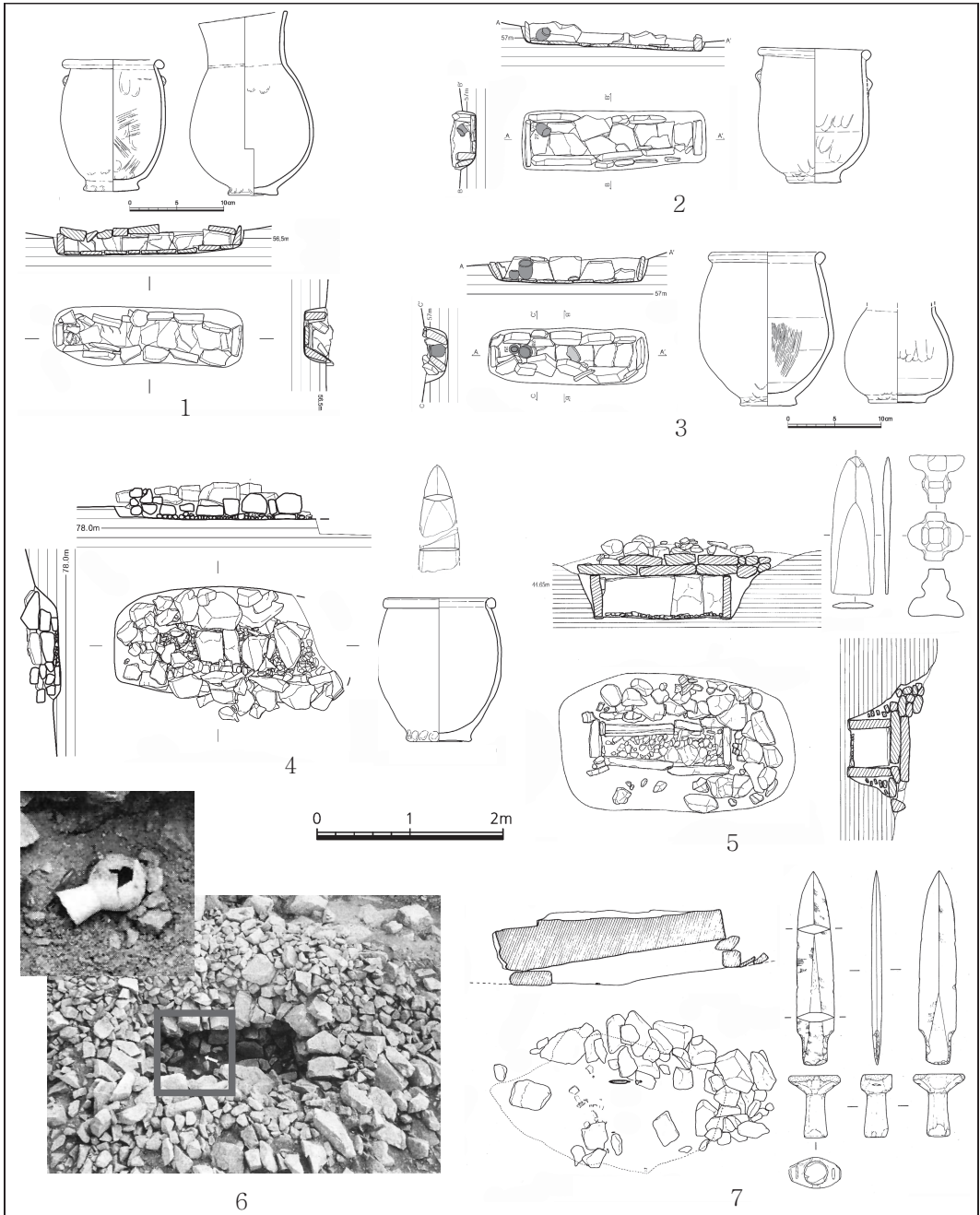


図2 慶北地域出土事例

1: 慶山 大鶴里 51-1 番地 2号 2: 慶山 大鶴里・校里 (4次) 1号 3: 慶山 大鶴里・校里 (4次) 5号
 4: 慶州 光明洞山 81 番地 16号 5: 浦項 鶴川里 4号 6: 英陽 新院里 7: 安東 知礼里 19号

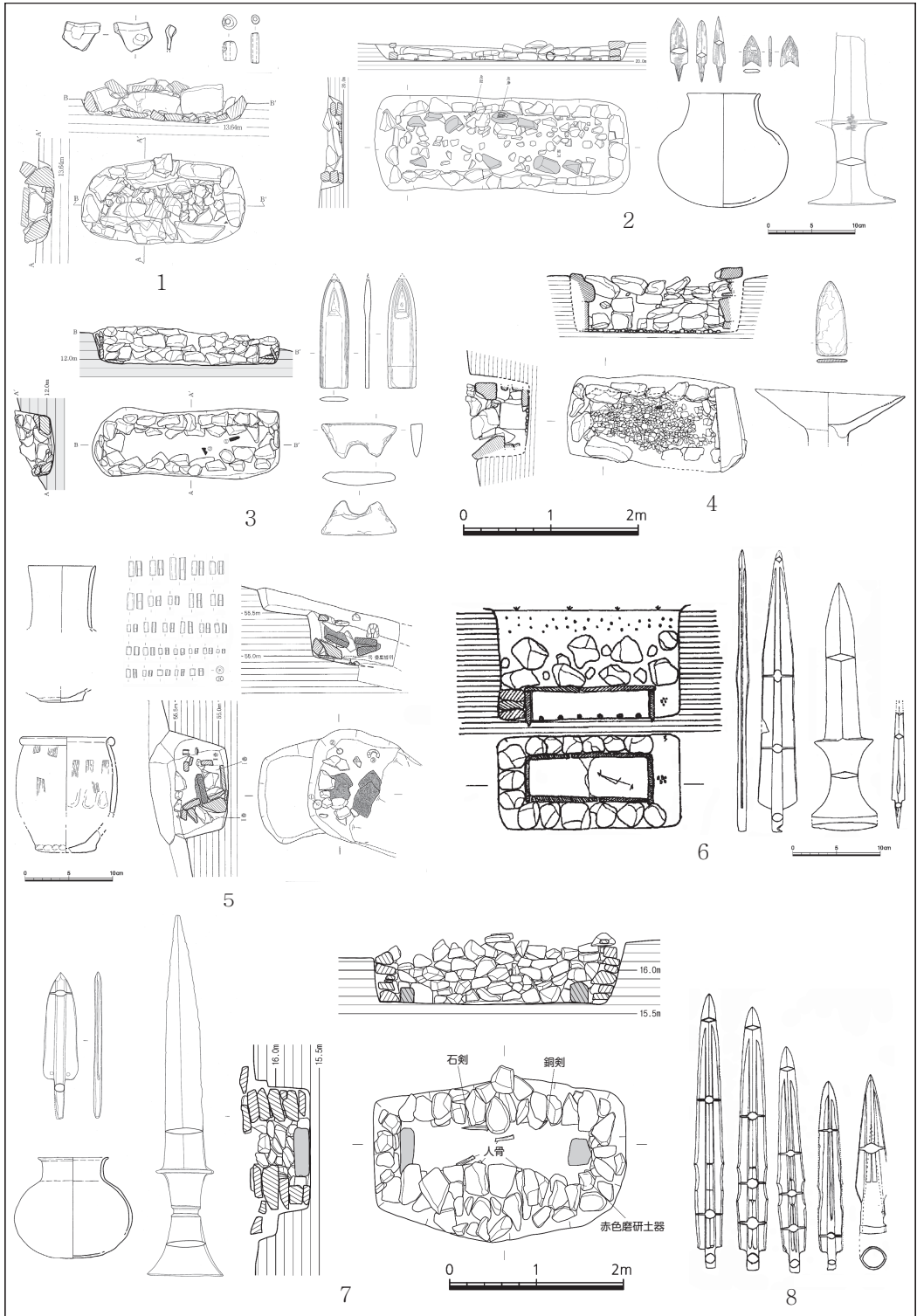


図3 慶南地域出土事例

1: 巨済 鵝洲洞4号 2: 昌原 徳川里7号 3: 泗川 香村里5号 4: 釜山 杜邱洞林石 5: 陝川 盈倉里12号
6: 昌原 鎮東里 7: 昌原 徳川里16号 8: 山清 白雲里

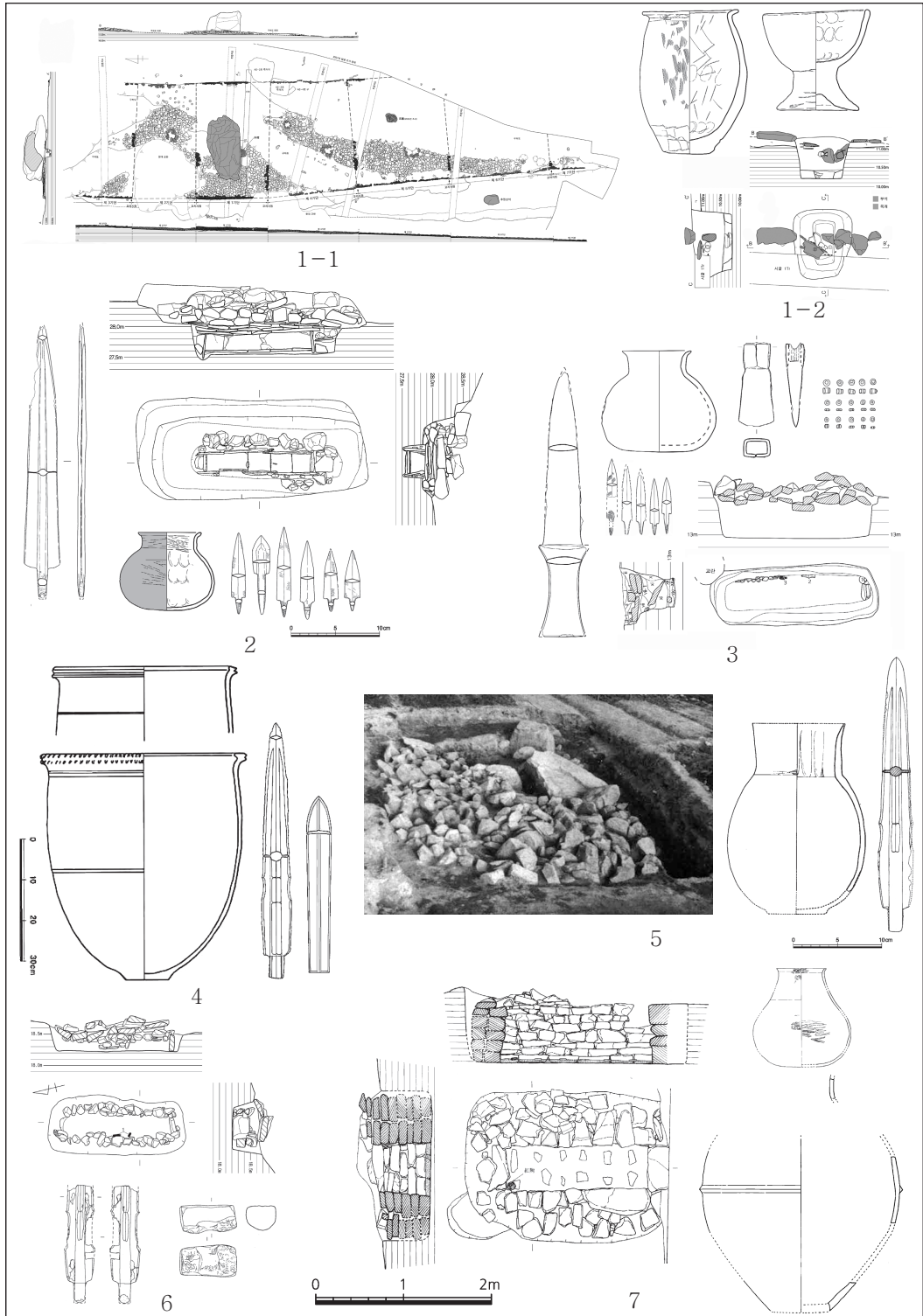


図4 金海地域出土事例

1: 亀山洞 A2-1号 2: 新文里3号 3: 大成洞 84号墳 4: 会峴里3号 5: 内洞1号
6: 栗下里 B-9号 7: 内洞2号

3の6)で計3点が確認された。慶北地域とは異なり、慶南地域の支石墓と石棺墓に細形銅剣の副葬事例が確認されるのは、支石墓と石棺墓が細形銅剣が出現し副葬される時期にも依然として主要な墳墓として築造されていた点に原因があると考えられる。

第二の特徴は、支石墓社会の遺物と木棺墓社会の遺物が共に副葬されない点である。厳密に言えば、両社会の遺物が共伴しないわけではない。昌原徳川里7号墓(図3の2)では粘土帯土器段階のものと思われる無茎式石鏃が、一段柄式石剣、一段茎式石鏃、赤色磨研壺と共伴した。徳川里21号墓でも粘土帯土器段階の石鏃と細長化した一段茎式石鏃が共伴する。また、新文里3号墓(図4の2)と徳川里16号墓(図3の7)、鎮東里石棺墓(図3の6)でも、変形琵琶形銅剣と一段柄式石剣、一段茎式石鏃、赤色磨研土器が共伴した。

注目すべき点は、支石墓社会の標識的な遺物と見なせる磨製石剣⁹と赤色磨研土器が木棺墓社会の標識的遺物と共伴しないことである。磨製石剣は剣という同一属性により細形銅剣と共伴しないと見なせるとしても、磨製石剣が粘土帯土器や黒色磨研土器と副葬される事例がない点は注目に値する。むしろ、昌原鎮東里石棺墓(図3の6)と徳川里16号墓(図3の7)では変形琵琶形銅剣と一段柄式石剣が共伴しており、磨製石剣が細形銅剣と共伴しないことを純粋に属性の同一性に起因する問題と見ることは難しい。同じ側面から赤色磨研土器もやはり粘土帯土器や黒色磨研土器と共伴せず、細形銅剣とも共伴しない。

これには二つの理由が考えられる。一つ目、磨製石剣と赤色磨研土器の消滅が、細形銅剣や粘土帯土器、そして黒色磨研土器の出現よりも古く共存し得なかったと考える点である。そうだとすれば、磨製石剣と細形銅剣

の共伴事例がない理由は占有期間の問題と見ることができる。嶺南地域では磨製石剣は昌原徳川里16号墓、昌原鎮東里、金泉文唐洞1号木棺墓で変形琵琶形銅剣と共伴したのみで、細形銅剣と共伴した事例はないためである。磨製石剣と細形銅剣の共伴事例がない点は、磨製石剣が嶺南地域に三角形粘土帯土器が出現して円形粘土帯土器と共存する時期に消滅(李ソクボム2015)したものと理解されるため、両遺物の占有期間が明らかに異なっていたことに原因があると考えられる。

しかし、磨製石剣が粘土帯土器、特に円形粘土帯土器や黒色磨研土器と共伴しない点は、占有期間の問題では説明できない。唯一の共伴事例として金泉文唐洞1号(図5)があるが、変形したものとはいえ琵琶形銅剣が出土した点、磨製石剣が木棺墓段階の型式である点、文唐洞1号以外の事例が皆無である点から見て、支石墓社会で流行した一段柄式や有節柄式石剣と円形粘土帯土器および黒色磨研土器の組み合わせは、そもそも成立しなかった可能性が高い。また、文唐洞1号木棺墓においても赤色磨研土器が粘土帯土器や黒色磨研土器と共伴しない点は、赤色磨研土器もまた木棺墓社会の標識的な遺物と共伴しなかった可能性を示している。

この観点から、磨製石剣と赤色磨研土器が木棺墓社会の標識的遺物と共伴しない二つ目の理由を考えることができる。まさに標識的副葬品の変化である。磨製石剣は農耕社会を導くイデオロギー(裴眞辰2006b)であり、赤色磨研土器は儀礼的器物(宋永鎮2016、裴眞辰2020、申ヒョナ2023)であるという点で、支石墓社会を代表する遺物と見なすことができる。つまり、磨製石剣と赤色磨研土器の副葬は、それぞれ社会的戦略と儀礼の器物を象徴するものであり、支石墓社会の核心

的な副葬観念である。一方、木棺墓社会の副葬観念は大量の鉄器と青銅器によって社会的戦略と儀礼の器物を表現した。つまり、このような副葬観念の違いから磨製石剣と赤色磨研土器が細形銅剣と円形粘土帯土器・黒色磨研土器とともに副葬され得なかったと考えられる。

それでは、一つ目の理由もまた副葬観念の変化に起因するものと考えられる。磨製石剣が細形銅剣の出現によって消滅したのであれば、その原因について考える必要がある。多くの研究者が細形銅剣の本格的な出現によって磨製石剣の消滅を説明している。筆者もこれに同意するが、現象に対する断片的な説明よりも変化に対する根本的な原因を考察する必要がある。

ここでは支石墓社会の磨製石剣と木棺墓社会の細形銅剣が、いずれも剣という外形的属性が同一であり、支配階級の象徴的表象物という内的属性もまた同一である点に注目したい。つまり、外形的形態と内面的意味がともに同一であるため、磨製石剣と細形銅剣は共存できなかったのである。したがって、細形銅剣によって剣の意味が移行された後、磨製石剣は意味を失い、もはや副葬品として認められなくなったのである。また、細形銅剣が副葬されなくとも、磨製石剣はすでに象徴性を失っていたため、粘土帯土器や黒色磨研土器とともに副葬されることなく姿を消したと考えられる。

このような副葬観念の変化は、木棺墓社会の遺物が埋葬主体部に副葬されはじめ、次第に拡散していく過程と関連している。筆者はこのような副葬観念の変化を、在地集団である支石墓社会が移住集団である木棺墓社会の文化を段階的に受容する過程として理解している。後述するが、〈表1〉のように墓域で

のみ木棺墓社会の遺物が確認される場合は、新たな文化を受容する初期段階である。したがって、支石墓の墓域で木棺墓社会の遺物が確認されたとしても、埋葬主体部内に副葬される遺物は全て支石墓社会の遺物に限定される。一方、〈表2〉は支石墓社会が木棺墓社会の文化をより広く受容し、副葬品として木棺墓社会の遺物を選択した段階である。この時、磨製石剣は細形銅剣に、赤色磨研土器は粘土帯土器と黒色磨研土器に代替され、次第に姿を消していったと考えられる。しかし、依然として墳墓自体は支石墓や石棺墓を維持している点から、副葬観念が変化しただけで墳墓と社会自体は依然として持続している。

何よりも磨製石剣と赤色磨研土器が互いに異なる属性の遺物と共伴しない点は、両遺物の意味喪失がほぼ同時に行われたことを推測させる。つまり、新たな剣と新たな土器の登場によって剣と土器が個別に変化したのではなく、社会的戦略(磨製石剣)と儀礼的器物(赤色磨研土器)に対する観念の変化が磨製石剣と赤色磨研土器の意味喪失をもたらしたのである。

第三の特徴は、金海地域が特に注目される点である。〈表2〉のように支石墓社会の墳墓に木棺墓社会の遺物が副葬された事例は、慶南と慶北地域で広範囲に確認されるが、地域別に1～2基の墳墓が確認されるのみで、多数が密集した事例は確認されていない¹⁰。このような様相は嶺南地域において粘土帯土器文化期の墳墓遺跡が少ないという見解(徐吉徳 2018)とも一致する。しかし、金海地域では7遺跡で12基の墳墓が密集する様相が確認された。中西部地域と比較すると多くの事例が確認されるとは言えないが、金海地域の密集度は嶺南地域においては突出した様相である。

金海地域が注目されるもう一つの理由は、確認された事例の大部分が三角形粘土帯土器段階に該当するだけでなく、三角形粘土帯土器段階の中でも新しい時期に相当する点である。金海地域で確認された事例のうち、新文里3号墓(図3の2)では変形琵琶形銅剣が出土したが、赤色磨研壺、一段茎式石鏃が共伴し、茂溪里支石墓も銅戈を再加工したものと推定される銅鏃が出土したが、一段柄式石剣、一段茎式石鏃、管玉が共伴したことから、この二つの例は三角形粘土帯土器段階より古い時期と見ることができるといえる。

一方、この二例を除けば、すべて三角形粘土帯土器段階に該当すると考えられる。特に三角形粘土帯土器の最も新しい型式である単口縁化した外反口縁甕が確認された亀山洞支石墓や、カリガラス、鍛造鉄斧が出土した大成洞84号墳、無文碗が出土した大成洞1号支石墓は、三角形粘土帯土器段階の中でも最も新しい時期と推定され、原三国時代の古い時期まで遡る可能性も指摘されている(李秀鴻2019、李盛周2023)。

金海地域が注目されるもう一つの理由は、外来系遺物である弥生系土器が確認される点である。内洞2・3号支石墓(図3の7)では弥生中期と考えられる弥生系土器がそれぞれ1点ずつ副葬され、会峴洞では1・2・3号甕棺墓(図4の4)でも同様に弥生中期と考えられる弥生系土器が甕棺として使用された。初期鉄器時代はそれ以前の時代とは異なり、積極的な対外交流が社会発展の原動力になったと認識されている(鄭仁盛1999、李盛周2007)。金海地域で弥生系土器が確認される点もこうした流れの一環として理解される。そうだとすれば、金海地域は内洞支石墓と会峴里甕棺墓の事例からみて、初期鉄器時代まで残存した支石墓集団が弥生集団と弥生

中期まで交流していた可能性も考慮する必要がある。

2. 転換の過程と主体

(1) 墳墓の転換過程

これまで支石墓社会の墳墓において木棺墓社会の遺物が確認される事例を検討してきた。特筆すべき点は支石墓の墓域で木棺墓社会の遺物が確認される場合だけでなく、支石墓や石棺墓に木棺墓社会の遺物が副葬される事例も相当数確認されるという点である。このような様相は支石墓社会の墳墓に木棺墓社会の文化が段階的に流入したことを示している。これを通して支石墓社会の墳墓が木棺墓社会の墳墓へと転換する過程を考察してみよう。

転換の過程は3段階あると考えられる。第1段階は支石墓や石棺墓に木棺墓社会の遺物が「登場」する段階、第2段階は支石墓や石棺墓に木棺墓社会の遺物が「副葬」される段階、第3段階は埋葬主体部まで木棺墓に「転換」されたが、支石墓の属性が「残存」した段階である。

第1段階¹¹は支石墓の墓域において粘土帯土器片や豆形土器片など木棺墓社会の遺物が確認される段階である。〈表1〉の事例が該当する。ここで注目されるのは、墓域で粘土帯土器片や豆形土器片などが確認されるものの、支石墓儀礼の結果物のように破碎されて撒かれた状態で確認される点、埋葬主体部が明らかに石棺墓として築造される点、副葬される遺物が磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器、玉といった典型的な支石墓社会のものであるという点である。つまり、木棺墓社会の遺物が出現しただけで、遺物の出土様相および墳墓の形態と副葬品は支石墓社会のものを維持

している段階である。

〈表1〉の昌原徳川里1号支石墓(図1の2)は、墓域内で多数の三角形粘土帯土器片と豆形土器片が確認されたが、埋葬主体部では身部が長くなった典型的な支石墓社会後期の一段莖式石鎌と管玉が副葬された。釜山分節遺跡5号墓の墓域でも豆形土器片が確認されたが、埋葬主体部には赤色磨研土器1点が副葬された。慶南地域だけでなく慶北地域でも様相は同じである。大邱達城坪村里25号石棺墓(図1の3)の上部でも三角形粘土帯土器片が確認されたが、埋葬主体部には一段柄式石剣と身部が長くなった磨製石鎌が副葬され、漆谷福星里12号石棺墓(図1の4)でも上部で石製劍把頭飾が確認されたが、埋葬主体部には磨製石鎌と赤色磨研土器、そして玉が副葬されていた。

墓域で確認された粘土帯土器や豆形土器が破砕されて撒かれた状態で確認される点も、支石墓社会の影響と考えられる。支石墓社会の儀礼と木棺墓社会の儀礼は明らかに異なる。両社会の儀礼は各社会を導く戦略と見なせるため、互いの儀礼を受け入れなかったものと考えられる¹²。そのため、木棺墓社会の遺物を使用しながらも、「支石墓の墓域」に遺物を「毀損」し「散布する行為」は、支石墓社会の儀礼と関連する行為と見なすことができる。

したがって、墳墓において支石墓社会と木棺墓社会が影響を与え合った最初の段階は、儀礼行為において木棺墓社会の遺物が使用されはじめたに過ぎず、副葬遺物として採用されることはなく、墳墓の形態も既存のものを引き続き維持した状態であったと想定できる。

第2段階¹³は木棺墓社会の遺物が埋葬主体部に副葬されはじめた段階である。この段階

で注目される点は二つある。一つ目、木棺墓社会の遺物が副葬されはじめると同時に支石墓社会の遺物が消滅することである。これは先述した副葬観念の変化に起因するものと考えられる。支石墓社会の代表的な象徴物である磨製石剣は、同一の属性を持つ細形銅劍へ、儀礼的器物と理解される赤色磨研土器もまた土器という同一の属性を持つ粘土帯土器や黒色磨研土器へと代替されながら消滅しはじめる。

磨製石剣と赤色磨研土器が象徴性を失ったのは個別に進行したのではなく、同時に発生したものと見られる。なぜならば、属性が異なる磨製石剣と土器の共伴も確認されていないためである。つまり、同一属性を有する遺物の共伴のみが確認されないのではなく、磨製石剣-粘土帯土器・黒色磨研土器と赤色磨研土器-細形銅劍の相互共伴すら存在しなかったのである。この点は、単に磨製石剣と赤色磨研土器が持つ象徴がそれぞれ新たな遺物に代替されたことを超え、支石墓社会の社会戦略(磨製石剣)と儀礼的器物(赤色磨研土器)が木棺墓社会の社会戦略(細形銅劍)と儀礼的器物(粘土帯土器・黒色磨研土器・青銅儀器)に代替されたことを示している。したがって、埋葬主体部に木棺墓社会の遺物が副葬されたことは、表面的な影響に限定されていた物質文化の変化が、支石墓社会の精神文化にまで深く拡大したことを意味する。

第3段階は埋葬主体部において石棺が築造されなくなり、木棺が採用されはじめる段階である。〈表2〉の事例の中で埋葬主体部が木棺である墳墓は、金海龜山洞A2-1号墓、金海大成洞84号墓、昌原徳川里21号墓、金泉文唐洞1号木棺墓である¹⁴。このうち金泉文唐洞1号木棺墓は土層にU字形陥没が明確に認められる点、木蓋が陥没した後、木棺

が再び陥没した二回の陥没が推定される点、木棺腐食土が残存する点(慶尚北道文化財研究院 2008) からみて木棺の使用が明確であると考えられる。しかし、本稿で提示する第3段階に該当するものと見なすことは難しい。

ここで提示する第3段階は、支石墓社会の墳墓が木棺墓社会の墳墓へ転換する最終段階に該当する。したがって3つの要素が全て必要である。一つ目、副葬遺物が木棺墓社会の遺物へ転換すること、二つ目、埋葬主体部が石棺から木棺へ転換すること、三つ目、支石墓社会の属性が残存することである。文唐洞1号木棺墓は副葬遺物と埋葬主体部共に木棺墓社会に該当するため、一つ目と二つ目の要素を有しているように見える。しかし、三つ目の要素は確認されない。また、比較的古い時期に該当するにもかかわらず木棺が採用された点から、文唐洞1号木棺墓は具体的な検討が必要である。

文唐洞1号木棺墓(図5)から出土した遺物は変形琵琶形銅剣1点、円形粘土帯土器1点、黒色磨研土器1点、磨製石剣1点、石製

剣把頭飾1点、磨製石斧1点、小玉97点である。先述のとおり、琵琶形銅剣と粘土帯土器は三角形粘土帯土器段階より古いものと見られる。また、黒色磨研土器も口頸部が長く直立に近い外傾を示す点(鄭仁盛 1999)、胴部最大径の位置が下部に形成されている点(崔鐘圭 1982)、高台が明瞭に形成されている点(徐吉徳 2018)からより古い時期に属するものと考えられる。また、磨製石剣が残存している点からみて文唐洞1号木棺墓は細形銅剣が出現する以前の段階に築造されたものである。

では、文唐洞1号木棺墓の埋葬主体部が木棺である点はどうのように見ることができだろうか。筆者はこれまで〈表2〉の事例を中心に、支石墓社会の墳墓に木棺墓社会の文化が流入する様相を把握した。しかし、逆の場合、つまり木棺墓社会の墳墓に支石墓社会の文化が流入した様相については言及していない。なぜなら、そのような事例が明確に確認されていないためである。これは支石墓社会が木棺墓社会へ完全に転換して支石墓社会の文化が残存していないという両文化間の時間的隔たりという一方的な理由では説明できない。これまで〈表1〉と〈表2〉を通して検討したとおり、また多くの研究者が指摘するように、支石墓社会と木棺墓社会の共存(鄭仁盛 1999、金奎正 2017、李秀鴻 2020、李東熙 2022、李盛周 2023)は明確に確認されるためである。

筆者はこれを木棺墓社会が持つ排他性として捉えたい。多くの研究者が木棺墓社会の集団を中国東北地域から韓半島へ流入した移住民(朴淳発 1997、朴辰一 2022)と見ている。木棺墓社会の集団は移住民として、すでに堅固な社会を形成していた支石墓社会を避けて高地帯に集落を営んだ(朴淳発 1997、

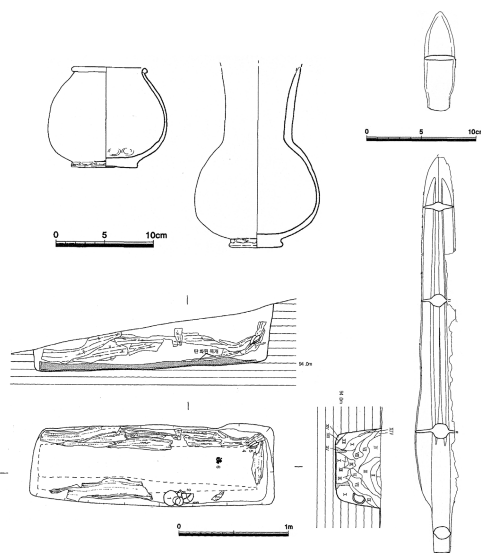


図5 金泉文唐洞木棺墓

鄭仁盛 1999)。しかし、それすらも大規模な集落を形成できなかったことから、移住民の単位は小規模であったと考えられる。特に嶺南地域は、円形粘土帯土器段階の移住民関連墳墓遺跡が多様に見られる湖西や湖南地域とは異なり、木棺墓文化が支石墓文化に吸収される様相（李東熙 2022）が確認される。一方、在地の支石墓社会は今回の検討で確認したように段階的に木棺墓社会の文化を受け入れながら木棺墓社会へと転換したものと見られる。

したがって、文唐洞 1 号木棺は支石墓社会と交流する前、あるいは意図的に交流しなかった純粋な木棺墓集団が築造した墳墓である可能性が高い。つまり、文唐洞 1 号木棺墓は嶺南地域に入ってきた初期の移住民が築造した墳墓であるため、比較的古い時期の遺物が副葬されたが、埋葬主体部として木棺が採用されたのである。金海新文里 3 号墓や昌原鎮東里では文唐洞 1 号出土の琵琶形銅剣よりも直線的で細形銅剣に近い変形琵琶形銅剣が出土したにもかかわらず、支石墓社会の標識的遺物である赤色磨研土器や一段茎式石鏃が共伴した点を考慮すると、木棺墓社会の標識的な遺物のみが副葬された文唐洞 1 号墓の排他性がより一層顕著に見える¹⁵。

そのため第 3 段階に該当する事例は、現時点では金海亀山洞 A2-1 号墓が唯一のものと考えられる。亀山洞 A2-1 号墓は副葬遺物として単口縁化した外反口縁甕と台付鉢が出土し、木棺墓社会の遺物が副葬遺物として採用された点、埋葬主体部として木棺が採用された点で、第 2 段階よりも木棺墓社会の墳墓に近い。しかし、亀山洞 A2-1 号墓は長さ 10m、高さ 3m、重量 350～400 トンと推定される上石が置かれている点、残存長 85m、幅 19m の墓域が造成されている点から、韓

半島最大規模の支石墓である。つまり、亀山洞 A2-1 号墓は副葬遺物と埋葬主体部ともに木棺墓社会の属性へと転換されたものの、依然として支石墓という範疇に位置づけられる支石墓社会の墳墓である。（(下)へ続く）

註

- (1) 粘土帯土器段階に関連する時代名称については依然として多くの議論がある。本稿は墳墓の転換に重点を置いているため、支石墓を築造した社会を「支石墓社会」、木棺墓を築造した社会を「木棺墓社会」と命名して議論を進めることにする。
- (2) 周辺に木棺墓社会の遺構が確認されず、後代の流入が困難な状況が増加している点を根拠に、支石墓の墓域から粘土帯土器が出土することを文化接変と考える見解もある（申英愛 2011）。
- (3) 表 1 では省略したが、確認された事例はほぼ全て粘土帯土器片と豆形土器片が支石墓社会の無文土器片とともに確認された。
- (4) 石材で埋葬主体部を構築することは支石墓社会墳墓の特徴である。木棺墓でも石材は使用されるが、埋葬主体部を構築するのではなく充填石として使用されるため、両者は明確な違いを示す。したがって石材で埋葬主体部を構築した石棺墓は支石墓社会の墳墓と見なすことができる。
- (5) 表 2 に粘土帯土器段階の石鏃として提示した石鏃である。断面六角形で袂入部が湾入した石鏃である。
- (6) 表 2 に粘土帯土器段階の石剣として提示した石剣である。長さが短いため石槍と報告された事例もある。
- (7) 金泉文唐洞 1 号木棺墓から出土した粘土帯甕は胴体の形状がキンチャク形甕に近

- く、一般的な円形粘土帯土器とは形態が異なる。しかし、粘土帯の断面が円形に近い点、石剣が残存している点、そして変形した形態ではあるが琵琶形銅剣が共伴していることから円形粘土帯土器段階の遺物と考えられる。
- (8) ただし、慶州典村里や達城坪村里で三角形粘土帯土器片が確認された点から、一部慶北地域でも支石墓と石棺墓の築造が三角形粘土帯土器段階まで続いた可能性もある。
- (9) 無茎式石剣ではなく、松菊里文化で流行した有節柄式や一段柄式石剣を指す。
- (10) 昌原地域は他地域より多い3遺跡5基の墳墓が確認された。昌原地域は金海地域と隣接しており、徳川里遺跡や鎮東遺跡のような新しい時期に該当する超大型級の支石墓が築造され、金海地域と類似した様相を示す可能性がある。
- (11) 嶺南地域の転換が他地域に比べて最も遅かったとするならば、嶺南地域には我々が青銅器時代の遺構と認識したものが、実際には初期鉄器時代まで存続していた遺構が多数存在(李秀鴻 2019)していた可能性が高い。そうだとすれば、支石墓社会と木棺墓社会が相互に影響しあった第一段階では、生活遺構から粘土帯土器が確認されるのみで、墳墓は支石墓社会と区別されない様相を想定できる。嶺南地域でこのような様相を示す遺跡は慶北地域の場合、大邱槐亭洞 178-2 番地、大邱上洞、大邱梨泉洞 295-7 番地、星州上彦里遺跡で確認され、慶南地域では宜寧雲岩里、山清沙月里環壕遺跡で確認される。これらの遺跡では石棺墓から遺物が出土しない場合、住居址の様相に基づいて石棺墓であっても初期鉄器時代として報告される事例がある。
- (12) 筆者はこの点を支石墓築造中断の核心的な原因と考えている。
- (13) 第2段階は両時期の遺物の共存期と木棺墓社会遺物の単独期に細分される可能性がある。そうであれば、副葬觀念の変化の時間的順序も導き出せると考える。しかし、現時点では金海地域を除くと各地域で1～2事例に過ぎず詳細な段階設定は難しい。
- (14) 金海大成洞 84 号墓は蓋石密封土と蓋石の間からカリガラスと鍛造鉄斧が出土したが、埋葬主体部内には一段柄式石剣、一段茎式石鏃、赤色磨研土器が副葬されていた。昌原徳川里 21 号墓も木棺が埋葬主体部として使用されたが、一段茎式石鏃と赤色磨研土器が副葬された。両事例は第2段階と第3段階の様相が共存する過渡期的様相と考えられる。ただし、埋葬主体部の形態が変化したことは支石墓という墳墓自体が変化しはじめた点から遺物のみが変化した第2段階より新しい様相と把握される。
- (15) 文唐洞 1 号木棺墓から出土した変形琵琶形銅剣は形態が价川龍興洞出土品と類似しているため、韓半島西北地域の青銅器文化の影響を強く受けたとする見解(李陽洙 2020)がある。これもまた文唐洞 1 号木棺墓の外来的要素を示すものと考えられる。

(原文：李明勳「支石墓社会から木棺墓社会への転換—転換の過程と主体に対する検討を中心に—」『嶺南考古学』第99号、嶺南考古学会、2024年、pp.5~39)